

【古文の通釈】

今となつては昔のことだが、藤原道長が、大納言として一条殿にお住まいになつていらしたとき、四月一日の頃、日がだんだん暮れかかってきた頃に、召し使いの男たちをお呼びになり、「御格子を下ろせ」とおっしゃったので、祭主の三位輔親が（そのときは）勘解由使の判官であつたが参上して、御簾の内側に入つて、御格子を下ろそうとすると、正面のこずえでめつたにないほどすばらしくほととぎすが一声鳴いて通り過ぎたので、殿（道長）はこれをお聞きになつて、「輔親は今の鳴き声を聞いたか」とおっしゃったところ、輔親が御格子を下ろすのを途中でやめて、ひざまずいて、「聞きました」と申し上げると、殿は、「それにしては（歌を詠むのが）遅いではないか」とおっしゃったので、輔親はこのように申し上げた。

山のほととぎすも人里に慣れて、たそがれどきに自分の名前を名乗るように鳴いていることだなあ と。

殿はこれをお聞きになつて、たいそうおほめになつて、上にお召しになつていた紅のお召し物一枚を取つて、（輔親の）肩におかけになつたので、輔親はいただいて、ひれふして拝んで、御格子を下ろし終えて、お召し物を肩にかけて、侍所に出てきたところ、侍たちはこれを見て、「これはどういうことか」と尋ねたので、輔親は先ほどのいきさつを語つたところ、侍たちはみな聞いて、たいそうほめたたえたということだ。

【古文の通釈】

昔、天智天皇と申し上げるみかどが、野に出て鷹狩りをされていたところ、（その）御鷹が、風に流されていなくなつてしまった。昔は、野を守る者（＝野守）がいたので、（みかどは野守を）呼んで、「御鷹がいなくなつてしまった、間違ひなく探し出せ」とおっしゃったところ、（野守は）謹んでうけたまわつて、「御鷹は、あの岡の松の上のほうの枝に、南側を向いて、そのようにしております」と申し上げたので、（みかどは）お驚きになつた。「いったいお前は、地面に向かつて、頭を地面につけて、他を見ることがない。どうやって、（松の木）のこずえにいる鷹の居場所がわかるのか」と（みかどが）お尋ねになつたところ、野守の老人は「民衆は、君主に顔を合わせることはありません。雑草の上にたまっている水を、鏡として（ものを映し）、頭のしらがにも気づき、顔のしわ（の数）も数えるものであるの、その鏡（＝水たまり）を見つめて、御鷹が木にいる様子を知つたのです」と申し上げたので、その後、野の中にたまっている水を、野守のかがみと言うのだ、と言ひ伝えているのだが、（一方で）野守のかがみとは徐君の（持つていた）鏡である（とも言ひ伝えている）。その鏡は、人の心の中を照らし出せる鏡であり、並々でない鏡であるの、世の中の人、こぞつて欲しがつた。この様子に、（徐君は）これ以上自分が（鏡を）持ち通すことはできないと思つて、墓の下に埋めてしまつたと、またある人が言っている。どちらが真実だろう（かわからない）。